

関西における鳥類標識調査地目録作成の試み

京都市 須川恒(すがわ ひさし)(編著)

アルラ前号(Alula No. 56(2018 春号):28-38)に「関西における鳥類標識調査地目録の作成」という文を書いた。この中では鳥類標識調査地目録・関西を作成する必要性を述べ、実際に作成する流れとして、目録の基本シート(表鳥類標識調査地目録の基本シート)と、その諸項目への記入について説明した。

詳細情報について追加するシート(表鳥類標識調査地目録の詳細追加シート)があり、さらに全体を俯瞰するために、目録の概括地図と概括表があり全体の目録が構成されると説明した。

目録記入例として、私が長期間かかわってきた舞鶴市冠島の目録の基本シートを示した(表基本シートの記入例冠島2級ステーション)。さらに目録の活用と展開に関して数点述べた。例えば、環境省の地方環境事務所単位のまとめ(関西なら近畿)が有効ではないかという考えを述べた。

近畿の鳥類標識調査地目録作成の試み

目録作成の試作を進めるために(自分で自分に尻たたきをするために)、日本鳥学会大会(新潟大学 2018 年 9 月 14 日～17 日)に以下のタイトルでポスター発表(ポスター発表は 9 月 15 日～16 日)を申し込み、目録記入のよびかけをした。まずは、自分がかかわってきた調査地を記入し、また共同発表者には記入したものを送りいただくか、実際に会った際に、私とやりとりをして目録への記入を進めた。さらに共同発表者以外にも、基本シートを記入したものを送りいただいて、目録作成の試みとしてまとめることができた。共同発表者および目録をお寄せくださった方に感謝する。

ポスター発表の要旨は以下である。

近畿の鳥類標識調査地目録作成の試み

○須川恒・中村進・古園由香・久下直哉

・山根みどり・狩野清貴(日本鳥類標識協会)

鳥類標識調査は、国の事業として、400 名を超える資格を持ったバンダ

一が全国各地で調査活動を続けている。都道府県別や1級2級ステーション別の毎年の放鳥数の集計は公開されている。しかし各地の調査地を単位とした情報の公開はそれぞれのバンダーにまかされている。それらの調査地には奥山や里山、離島、河川敷や湖岸、都市近郊の緑地帯などさまざまな環境がふくまれ、それらの諸環境の保全に資する、野外観察では得にくい個体群特性についての情報(例えば繁殖鳥や越冬鳥の帰還情報など)が多く含まれているが、それらの情報は未整理のものが多い。今後効率的に情報整理を進めるために、近畿のバンダー有志で入り口となる情報集として、継続的調査が実施されているか、かつて継続されていた調査地の基礎情報を把握できる目録を作成する。対象とする近畿は近畿地方から三重県を除く滋賀県・京都府・大阪府・奈良県・和歌山県・兵庫県で、関西ともいえる。また、標識調査の上で近畿に深い関係を持つと思われる福井県の一部を含める。

関西というところがちょっと漠然とするので、環境省近畿地方環境事務所の守備範囲の近畿(今回はそのうち京都府、大阪府、和歌山県、兵庫県における計10ヶ所)に近畿に関係が深いと思われる福井県の一部(織田山と中池見湿地の2ヶ所)の計12ヶ所の調査地をまとめる試みとなった。この範囲にはほかにも多くの標識調査地があるが、「目録作成の試み」を検討するためには十分と思う。

資料ファイルの形とポスター発表の形

まず、今回利用した資料ファイルの形について書く。目録の基本シートと追加シートはエクセルファイルにして、調査地ごとのワークシートをつくった。シートの欄を微妙に修正する必要があったので、このエクセルの形が便利だった。また、概括表などのファイルもそれぞれのワークシートに作成した。協力者に、空白の基本シート・追加シートを送って記入を依頼した。だんだんと記入済みのシートが増えてきたので、それらを参考にして記入したファイルを送っていただけた。

ポスター発表に使う印刷物はすべてエクセルのファイルを印刷してつくった。ポスター発表のスペースはA0サイズ(841 × 1189mm)なので、12ヶ所ある調査地の基本シートをB5版で示すだけでも面積が多くとられてしまう。調査の趣旨とか結論を示すスペースも必要だった。そこで、調査地の目録(基本シート+追加シート)はB5版のクリアフォルダーを3行4列に並べる形にし

た。クリアフォルダーから調査地の基本シートを抜き出して近くで見てもらい、また追加シートを見てもらうことができた。

標識調査地目録の概括地図と概括表

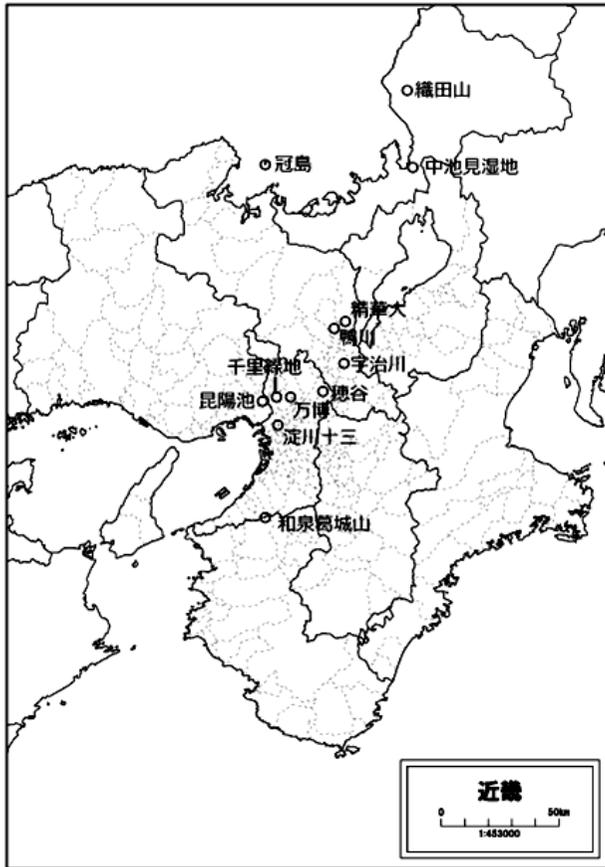


図1 標識調査地目録の概括地図

表1 標識調査地目録の概括表

府県名	市町名	調査地名	主環境	主要調査者	緯度	経度	ステーション	PCODE
兵庫県	伊丹市	昆陽池	都市公園・池	須川他	34.79	135.40	なし	280124
京都府	舞鶴市	冠島	無人島	須川他	35.68	135.43	冠島2級	260009
京都府	京都市	宇治川	河川日シ原	須川他	34.92	135.76	宇治川2級	260006
京都府	京都市	鴨川	都市河川	須川他	35.06	135.75	宇治川2級	260010
京都府	京都市	精華大	里山	狩野他	35.07	135.77	宇治川2級	260046
大阪府	大阪市	淀川十三	河川日シ原	久下他	34.72	135.50	淀川口2級	270054
大阪府	枚方市	穂谷	里山	古園	34.79	135.72	淀川口2級	270073
大阪府	吹田市	万博	都市公園緑地	山根	34.80	135.53	淀川口2級	270035
大阪府	豊中市	千里緑地	都市緑地帯	熊代他	34.80	135.48	淀川口2級	270028
和歌山県	紀の川市	和泉葛城	奥山	中村	34.35	135.43	なし	300015
福井県	越前町	織田山	里山	佐藤他	35.98	136.02	織田山1級	180001
福井県	敦賀市	中池見	泥炭湿地	吉田	35.62	136.10	なし	180019

図1に標識調査地目録の概括地図を、表1に標識調査地目録の概括表を示した。あらかじめことわっておくが、調査地名や緯度経度は、標識センターで使っているPCODEに登録されているものと微妙に違う可能性がある。これらの点は、今後確認していく必要がある。

12ヶ所の調査地のうちわけは、兵庫県が1ヶ所、京都府が4ヶ所、大阪府が4ヶ所、和歌山県が1ヶ所、福井県が2ヶ所となった。

目録を記入する際に驚いたことは、中村進さんが調査している和泉葛城である。ここは和歌山県と大阪府の境界で、中村さんは現在、大阪府側(岸和田市)で調査しているのでそのように当初は記入していたが、PCODEを聞くと和歌山県の番号(30からはじまる。大阪府なら27ではじまる)だった。調査開始時は和歌山県側だったとのことだった。標識センターには和歌山県のデータとして情報が入力されているので、とりあえず今回は、和歌山県の調査地としてまとめさせていただいた。

調査地を環境別にまとめてみると、奥山(1ヶ所)、里山(4ヶ所)、都市環境(都市河川、都市緑地、都市公園など、3ヶ所)、河川ヨシ原(2ヶ所)、泥炭湿地(1ヶ所)、無人島(1ヶ所)となった。まだ少数の調査地の目録を作成しただけだが、実に多様な環境で標識調査が実施されていることに驚く。

標識調査期間の年別のまとめ

表2にそれぞれの調査地の標識調査が何年にはじまったか、また現在続いている調査は何年に終わったか(中断の場合も含め)を示した。

実は調査地目録作成の私の一番の関心は、この表の作成で、ポスター発表においてもそのように説明した。

標識調査は、植物採集や昆虫標本のような現物が残るわけではなく、過去に熱心に行われた重要な調査だとしても情報が残るだけである。最近では標識センターのデータベースに蓄積された情報を申請すれば利用できるようになったが、そのためには、どの期間にどのような調査が行われたかの手掛かりとなる基礎的な情報が調査地単位でまとめられている必要がある。

表2にまとめた1962年からの標識調査の実施期間を理解するには、日本の標識調査の歴史を理解する必要があるのでボックス1に概要をまとめた。もちろん、それらの歴史とバンダーのかかわりの個人史があって実際の調査となっているので私(須川)の個人史を例としてボックス2にまとめた。

表2 調査地の調査実施期間(年)												
	兵庫県	京都府	京都府	京都府	京都府	大阪府	大阪府	大阪府	大阪府	和歌山県	福井県	福井県
	伊丹市	舞鶴市	京都市	京都市	京都市	大阪市	枚方市	吹田市	豊中市	紀の川市	越前町	敦賀市
	昆陽池	冠島	宇治川	鴨川	精華大	淀川十三	穂谷	万博	千里緑地	和泉葛城	織田山	中池見
	須川他	須川他	須川他	須川他	狩野他	久下他	古園	山根	熊代他	中村	佐藤他	吉田
1962		○										
1963		○										
1970												
1971		○										
1972		○										
1973		○										○
1974		○										○
1975		○										○
1976		○										○
1977		○	○									○
1978		◎	○	◎								○
1979		◎	◎	◎								○
1980		◎	◎	◎								○
1981		◎	◎	◎								○
1982		◎	◎	◎								○
1983		◎	◎	◎								○
1984		◎	◎	◎								○
1985		◎	◎	◎								○
1986		◎	◎	◎								○
1987		◎	◎	◎								○
1988		◎	◎	◎								○
1989		◎	◎	◎								○
1990		◎	◎	◎								○
1991		◎	◎	◎					○			○
1992		◎	◎	◎				○	○			○
1993		◎	◎	◎				○	○			○
1994		◎	◎	◎				○	○			○
1995		◎	◎	◎				○	○			○
1996		◎	◎	◎		○		○	○			○
1997		◎	◎	◎		○		○	○			○
1998		◎	◎	◎		○		○	○			○
1999		◎	◎	◎		○		○	○			○
2000	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2001	◎	◎	◎	◎		○	○		○			○
2002	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2003	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2004	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2005	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2006	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2007	◎	◎	◎	◎		○	○		○	○		○
2008	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2009	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2010	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2011	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2012	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2013	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2014	◎	◎	◎			○	○		○	○		○
2015	◎	◎	◎		○	○	○		○	○		○
2016	◎	◎	◎		○	○	○		○	○		○
2017	◎	◎	◎		○	○	○		○	○		○
2018	◎	◎	◎		○	○	○		○	○		○
種数									41			
総(延)個体数									1524			

現在行っている調査がいつからはじまっているか、現在は継続していない調査がいつからいつまで調査していたかを知る。○調査実施年、◎須川がかかわった調査

ボックス1 日本における鳥類標識調査の歴史(※1～5)

- 1920年代 1924年(大正13年)農商務省畜産局鳥獣調査室で開始
- 1930年代 1931-2年鳥島で海鳥に標識
- 1940年代 1943年までに317000羽放鳥。回収15000羽。戦争で中断。
1946～1949年GHQオースティン氏のかかわり(※2 カスミ網猟禁止。
カスミ網の調査価値を海外へ紹介)。
- 1950年代 標識試験計画失敗(違法カスミ網者への委託)。中断続く。
- 1960年代 国際鳥類保護会議(1960年東京)の提言を受け、1961～3年林野庁
適地調査(山階へ委託)。冠島でも調査。
1996年以降国の調査続く。1964年～1970年マックルア氏を中心
とするMAPS(アジア移動動物病理調査)※3。
- 1970年代 1971年環境庁発足。1972年標識調査が林野庁から環境庁へ移管。
1級、2級ステーション設定開始。
1974年日米渡り鳥保護条約発効(最初の渡り鳥条約)
吉井正・叶内拓哉(1979)渡り鳥。東海大学出版会。
- 1980年代 (1979年～)ライセンス認定のための講習会システムの整備。
1981年日豪渡り鳥保護協定発効 日中渡り鳥保護協定発効
(1986年～)日本鳥類標識協会発足(※4)。
1988年日ソ(日露)渡り鳥保護条約発効
(1988年～)標識センターがデジタル入力開始。
- 1990年代 回収記録を示す「渡り鳥アトラス」(1997年2002年、WebGis版)
ODAによる東南アジアへの標識技術普及活動。協会国際共同調査開始。
- 2000年代 (2001年～)生物多様性センターのサイトに毎年の標識調査報告書掲載。
(2004年～)日本鳥類標識協会ウェブサイト開設(※4)
(2009年～)山階標識研究室は保全研究室に改称。
- 2010年代 2014年第26回IOC(国際鳥類学会議)が東京立教大で開催。
初日に世界の標識関係者の会議(※5)。
2018年12月8-9日本鳥類標識協会大会in大阪

参考情報

※1 山階鳥類研究所鳥類標識センター(2008)鳥類標識調査マニュアル(改訂第11版).p3

※2 [オリバーオースティン自伝「オーラルヒストリー」](#)

※3 [エリオット・マックルアWikipedia](#)

※4 [日本鳥類標識協会ウェブサイト](#)

※5 [渡り鳥条約への山階芳麿氏のかかわり](#)

ボックス2	鳥類標識調査へのかかわりの個人史例(須川恒)
～1977年	学術許可でカスミ網を使用。織田山、冠島調査に参加(いずれも長谷川博さんに勧められ)。
1978年	山階鳥研藤村仁さん(故人)の推薦で標識調査員となる(講習会システムは1979年から)。
1978年	冠島のオオミズナギドリの標識調査に10mメッシュの区画導入開始。
1979年	2月鴨川で見ついている素性不明の標識ユリカモメをターゲットに調査開始(カラーリング装着)。
1980年	5月カムチャツカの標識者と連絡開始(吉井正氏による支援)。12月鴨川で標識ユリカモメ捕獲。 (この経過は冷戦下のトピックとして大きく報道もされ標識調査の醍醐味を感じる)
	宇治川のヨシ原保護をツバメの標識調査で支援成功。以後宇治川にかかわる。
1982年	8月モスクワ国際鳥学会議に参加。ユリカモメの日ソ共同調査結果を発表。 雁類やツル類の渡り解明にかかわる。
1984年～	冠島のオオミズナギドリのデジタル入力開始。
1986年～	カムチャツカで首輪標識されたオオヒシクイが国内で多数発見。
1991年	カムチャツカが西側に開かれる。オオヒシクイ(集団換羽地)、ユリカモメ(コロニー)で標識調査。
1991年～	龍谷大学深草4日間夏期集中講義:宇治川のツバメの標識調査見学を組み込み好評(～2018年)
1998年	カムチャツカで標識協会共同調査(調査は予備も含め1997～2000年、協会特集号2010年)
1999年	12月尾崎さんとマレーシアボルネオサバ州でツバメの標識調査ワークショップ参加。
2001年～	昆陽池のカワウ標識調査にかかわり、竹生島(須藤明子さんら)と並行調査開始。
2004年～	標識協会ホームページ作成にかかわる。
2014年	8月立教大で国際鳥学会議 協会ウェブサイトの広報、冠島のオオミズナギドリのポスター発表。
2018年	11月大阪自然史フェスで講演予定「足環物語を越えて、地域がつながる、世界がつながる」

表2(標識調査地の調査期間)やボックス1(日本における標識調査の歴史)、ボックス2(標識調査の個人史例)について説明しだすときりがないので少しだけエピソードを紹介する。ポスター発表では、表2、ボックス1と2の内容はホッチキスで閉じて、A4サイズのクリアフォルダーに置き、そこからとってもらおうと近畿の標識調査、日本における標識調査の歴史、私の標識調査の個人史について、発表を聞いて下さる方のスタンスでいろいろな形で話すことができた。

大きく見ると環境庁ができて標識調査事業が本格的にはじまった1972年からの歴史がある。この時点では調査は織田山や冠島に限られ、1980年頃から鴨川におけるユリカモメ調査や宇治川河川敷におけるツバメの集団ねぐらを対象とする調査が加わった。1979年からの講習会によるバンダー養成が順調にすすみ、大阪府などで1990年代以降、さまざまな継続的調査が多くはじまったことがうかがえる。

冠島のオオミズナギドリへの標識調査に私が継続的にかかわりだしたのは1978年からだが、それ以前の歴史がある。戦後舞鶴市の吉田直敏氏によるオオミズナギドリの生活史解明の調査があり、1961年と1962年には林野庁時

代の標識調査事業に山階鳥研からの呼びかけもあって協力している。現在年に2回3泊4日の舞鶴市主催の調査があって、海上自衛隊による輸送支援が得られて継続的なオオミズナギドリへの標識調査を実施している。その源流をたどると1961年に至る。当時吉田直敏氏は、標識調査は国の事業ということで、海上保安庁や海上自衛隊による輸送支援を要請し海上保安庁や海上自衛隊の支援が得られた。1970年頃からはずっと海上自衛隊の支援が得られる流れとなっている。

現在は調査されておらず一定期間で終わった標識調査もある。私がかかわるものでは鴨川のユリカモメ調査(1978~2007年)がある。山根みどりさんには万博記念公園の調査(1992~1997年)について、熊代直生さんには千里緑地の調査(1991~2004年)の目録についてお願いして目録を提供いただいた。いずれも調査地の事情や個人的事情で継続はされていない。現在継続されている調査を紹介される機会はいろいろあっても、このような調査を紹介する機会は少ないので目録にしておくことが特に大切と思う。また、関西のバンダーが標識調査をはじめのきっかけとなる出会いが、これらの調査の際にいろいろとあったようで、バンダーの個人史を紐解く上で大切な調査になっていると思う。

標識調査の月別のまとめ

表3に、最近(2015~2018年)継続している標識調査の月(上下旬)別の実施状況を、調査タイプ別に示した。

調査タイプは小鳥類(カスミ網調査)と、それ以外の手捕りなどによる海鳥や水鳥の調査にわけた。調査頻度は、月に1~数回、毎月1回(1~2回)、あるいは数日宿泊してというタイプにわけた。

このようなまとめをすることで、バンダー希望者が修練できる可能性のある場が見えてくる。一つの調査地では修練できることは限られていても、さまざまなタイプの標識調査が行われているので、いろいろな訓練を受けることが可能となる。もちろん、それぞれの調査地には調査者の方針(作法)があって、参加希望者はそれらを理解して参加することが必要である。

標識調査の現場の見学をしたい人もいると思う。標識調査の普及啓発活動の必要性をどう考えるかは、目録への記入された内容を読むことで、各調査者の考えがわかる。

表3 最近(2015～18年)調査をしている調査地の月(上下旬)別調査タイプ別実施状況

調査地	兵庫県	兵庫県	京都府	京都府	京都府	京都府	大阪府	大阪府	和歌山県	福井県	福井県
	伊丹市	西宮市	舞鶴市	京都市	京都市	京都市	大阪市	枚方市	紀の川市	越前町	敦賀市
	昆陽池	武庫川*	冠島	宇治川	宇治川	精華大	淀川十三	穂谷	和泉葛城	織田山	中池見
調査者	須川他	須川他	須川他	須川	狩野	狩野他	久下他	古園	中村	佐藤他	吉田
対象種類	カワウ カモ類	ユリカモメ	オオナギ 小鳥類	ツバメ 集団塒	小鳥類	小鳥類 来春まで	小鳥類	小鳥類	小鳥類	小鳥類	小鳥類
1月上旬	カモ類	ユリカモメ			小鳥類	小鳥類		小鳥類			
1月下旬	○	○			□	□		□			
2月上旬	○	○			□	□		□			
2月下旬	○	○			□	□		□			
3月上旬					□	□		□			
3月下旬					□	□		□			
4月上旬	カワウ雛				□	□		□	小鳥類		小鳥類
4月下旬	○				□	□		□	○	小鳥類	○
5月上旬	○				□	□		□	○	◎8日	○
5月下旬	○		◎4日		□	□		□	○		○
6月上旬	○				□	□		□			○
6月下旬	○				□	□		□			
7月上旬	○			ツバメ	□	□		□			
7月下旬				集団塒	□	□		□			
8月上旬				○	□	□		□	小鳥類		
8月下旬			◎4日	○	□	□		□	○		小鳥類
9月上旬				○	□	□		□	○		○
9月下旬				○	□	□		□	○		○
10月上旬					□	□		□	○		○
10月下旬					□	□		□	○	小鳥類	○
11月上旬	カモ類	ユリカモメ			□	□	小鳥類	□	○	◎22日	○
11月下旬	○	○			□	□	○	□	○		○
12月上旬	○	○			□	□	○	□	○		○
12月下旬	○	○			□	□		□	○		

バンダー希望者が修練の場となる可能性のある調査活動

1～数回

月1/バンディング

宿泊バンディング

武庫川* は目録は作成していない

標識調査地目録の基本シートと、追加シートの一部

文末の付表 1～12 に標識調査地目録の基本シート(付表 1 a～12 a)と、追加シートの一部(付表 1 b(昆陽池)、付表 6 b(淀川十三)、付表 8 b(万博))を示した。

ここでは記入の過程でわかってきた記入項目について気づいた点を書く。記入項目の説明は前号で書いた内容でほぼ充分と思っていた。しかし読んだ

だけではどういう趣旨の項目かが理解しにくい場合もあったようだった。とりあえず情報を基本シートに記入して送っていただいた後に私とやりとりをして、趣旨にあった記入をしていただくことができた。表1の概括表や、表2の年別、表3月別のまとめをしようとするとう情報が記入されていないことに気づいて、追加の情報を送っていただいた。また図1の概括図で緯度・経度で調査地点を表示すると記入ミスがみつかってとりあえず知っている調査地の地図情報から緯度・経度を入力した場合もあった。

自分の調査内容を簡潔に説明する資料として基本シートや追加シートを使ってみると、基本シートをどのように書くとよいか、どのような情報を追加シートに書くと便利かということが判ってくると思う。

標識調査地目録の活用と展開

・調査地目録の概括

まだ12ヶ所の標識調査地の情報が集まっただけの段階だが、このような基本シートで基本的な調査地情報は把握できると思った。ただし、それぞれの欄(追加シートも含め)の趣旨をどう活かしてコンパクトに情報を記入するかのコツについてはまだ模索段階である。

どのような範囲について目録を作成するのがよいのか、またその中でどのような標識調査地を優先して目録を作成するのがよいのかがいろいろな考えがありうる。今回は近畿と一部関係の深い福井県を対象にした。標識調査の許可書で関係の深い地方環境事務所の範囲の状況把握をバンダー自身も意識するという点で、このような範囲設定はアイデアの一つだと思う。他の地域に応用する場合も同じような考えで進めやすい。もちろんこれより小面積の範囲について詳細に情報を把握するという形も考えられる。

目録はその範囲内で協力が得られる有志によって作成した。趣旨を説明すると積極的に記入していただける調査地もあった。このような目録をつくることで、自分の調査地にかかわる長年の情報をコンパクトにまとめ発信しやすいツールとなると理解してもらえたと思った。

近畿(一部福井)について12ヶ所の標識調査地の情報が集まっただけでも、地道だがすごい調査をしていると示すことはできるようになったと思う(まだ私の主観かもしれないが…)。さらに目録とする調査地を増やすことで、一つ一つの活動はそれぞれ限界があっても、全体としてすごいことをやっ

ると示すことが可能と思う。

図1の概括図は、地図ソフトは使わず手書きで作成した。調査地の緯度・経度は、度分および、度を小数であらわす二通りの欄を設けた。後者の緯度・経度の一覧がエクセルファイルにあると、あたらしいエクセル(2016年版以降)では地図を描くことができるらしい。

・年別の経過

今回の試みで、表2調査地の調査実施期間(年)として年別の経過をまとめることができた。この表を理解する上ではボックス1に示すように日本における標識調査の歴史が必要で、その関係が見えてきたのが興味深かった。標識調査は二国間の渡り鳥条約を支える国の事業であるという側面をあらためて認識できたと思う。

具体的に調査がどうしてはじまったかは個人の標識調査の歴史(どういったきっかけで標識調査に興味を持ち、どのように資格をとって、どのような活動をしてきたか)と深くかかわる。今回はボックス2で私が複数の調査地をはじめた経過を簡単に紹介した。

このボックス2の個人の標識調査の歴史がらみで、いままで山階鳥類研究所から送ってもらっていた標識鳥回収記録の用紙を種別・年度別にフォルダーにまとめてみる気になった。まだ全部の回収記録が見つからない(私の資料の山から「回収」されていない…)が、1980～2018年にかけて、9種(オナガガモ、オオミズナギドリ、カワウ、ユリカモメ、ウミネコ、ヒヨドリ、メボソムシクイ、スズメ、オオジュリン)の回収記録があり(ツバメもあるはずだが送ってもらった用紙が見つからない)、年度別に並べていった。その中には、いろいろな意味で注目すべき回収例もある。

ばらばらであった資料を発掘して年度別に並べ直して俯瞰してみようという気分がうまれるのが、私のように整理がなかなか進まない人にとっては一つの効果と思う。

・月別の経過

表3に最近(2015～2018年)継続している標識調査の月(上下旬)別の実施状況を、調査タイプ別に示した。バンダー希望者が修練する場として可能性のある調査地一覧になっている。熱心なバンダー希望者はこのような表がなくても自分で情報を収集して必要な修練の場に広く出かけている。でも、バンダーになるにはどうすればよいのかという問は時々受けるので、その際に例

えばこのような時期にこのような調査地で修練をさせてもらえると示せるのは便利と思う。

この表を作成してわかってきたことだが、複数のバンダーがかかわって行われている調査地が多い。また個人の調査地でも隣接するバンダーが訪問することがしばしばある。その際に、並行している調査で、調査時期や調査日が重なることが多く、共同調査がしにくい場合や、訪問しにくいことがたびたびおこる。このような表を作成して見通しをつけることで、ある程度は調査日を調整することが可能となると思った。

・識別ガイドとの連携

主要放鳥種の欄を設けて、4期(繁殖期、越冬期、春秋の渡り期)別に主要放鳥種を数種書いてもらう形にした。12ヶ所の調査地で記載された主要種は重なる種も多い。それらの種名を集計して、適切な識別ガイドがすでにあるかどうかをチェックする必要がある。そして将来的には識別ガイドのファイル(イメージは須川, 2015)とのリンクを図りたいと思っている。

テクニカルなことだが、エクセルファイルだと記入欄そのものをハイパーリンクすることは可能だが、記入欄中の種名をハイパーリンクすることはできない。目録はエクセルファイルで作成し、最終的にはワードファイルにして種名と識別ガイドファイルのリンクができるようにしたいと思っている。

リンク先の識別ガイドのイメージだが、詳細な記述以前に、まずその種は成幼の区別が可能か、雌雄の区別が可能かのマトリックスを示す。例えば、秋の渡り期に、シロハラの子の識別は可能(識別点はいろいろあり)で、成鳥ならば雌雄判別が可能だが、幼鳥ならば雌雄判別は通常できないといったマトリックスを示すことである。基本的な種についてこのマトリックスを示すことが大切と思っている。

私は1970年代から織田山で多くのバンダーから主要な小鳥類の識別ポイントをうかがい、種別のメモとして残している。時代の経過にともない、徐々に口伝で伝えられる識別ポイントが正確になっていくのが判って面白い。

参考文献

須川恒(2015)スベンソン氏との京都における会合ー日本の鳥類標識識別ガイド作成をめざしてー. ALULA(No. 50, 2015 春号):38-45.

須川恒(2018)関西における鳥類標識調査地目録の作成. Alula, No. 56:28-38.

付表 1 a 鳥類標識調査地目録(昆陽池公園)基本シート

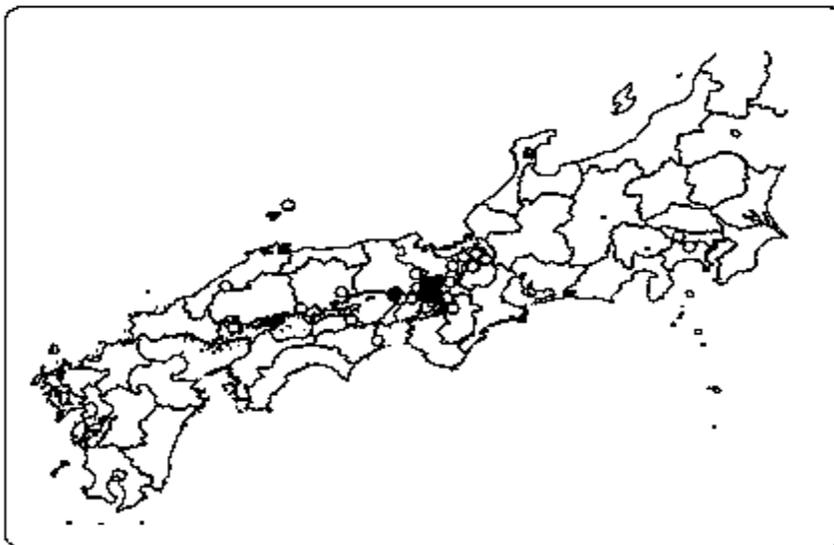
鳥類標識調査地目録		記入者	須川恒	記入年月日	2018年8月31日
PNAME	昆陽池公園		PCODE	280124	
LOCATION	KoyaikePark				
ステーション名	なし		標高	39 m	
緯度	34° 47' N:34.79° N		経度	135 ° 24' E:135.40° E	
調査地名	兵庫県伊丹市市昆陽池公園				
調査地の環境	昆陽池は1970年代整備された野鳥公園。冬期は多数のカモ類の越冬地として著名。池の中に日本列島型の島がつくられ、ここのサギ類コロニーに1995年頃カワウが営巣を開始。				
主要調査者	須川恒、片岡宣彦、山根みどり				
調査期間・頻度	2001年1月22日よりユリカモメの調査を開始。2001年4月3日よりカワウの巣の雛の調査を開始。2009年から越冬期のカモ類の調査を開始している。いずれも金属足環とともに、個体識別されたカラーリングを装着している。				
主要放鳥種	(繁殖期)カワウ(巣内雛)、(越冬期)ユリカモメ、カモ類(オナガガモ、ヒドリガモ)				
標識調査の成果	2001年から2018年までカワウ917羽にカラーリング標識を行った。ユリカモメは2000年度(冬)から2008年度から20羽にカラーリング標識を行った。カモ類は2008年度から2018年度にかけて約20羽(要チェック)にカラーリング標識を行った。カワウは滋賀県竹生島と並行して調査をすすめていて、両コロニーからの分散や移動傾向の違いを明らかにできつつある(竹生島のほうが遠距離の移動をする)。				
保護保全上の課題	昆陽池公園は関西圏にある先駆的な都市型水鳥公園である。調査の際には公園の職員に協力いただいている。鳥類の標識調査を通して生息する水鳥の生態を明らかにして公園に協力している。何よりも越冬しているカモ類やユリカモメの長距離の渡りの魅力を伝えることが課題である。都市公園ならではの外来種問題や、カワウ問題、あるいは鳥インフルエンザ問題にも必要な協力をしている。				
備考	<u>カワウ、ユリカモメ、カモ類のカラーリング標識調査の詳細については、日本鳥類標識協会のサイトにある以下のカラーリング情報ページに掲載しているhttp://birdbanding-assn.jp/J05_color_ring/color.htm</u>				

付表 1 b 鳥類標識調査地目録(昆陽池公園)追加シート

鳥類標識調査地目録	記入者 須川 恒	記入年月日	2018年8月31日
PNAME 昆陽池公園		PGODE	280124
詳細情報テーマ 昆陽池と滋賀県竹生島の標識カワウの確認地点分布			



図Ⅱ-2-4. 竹生島で標識した個体が観察された場所
○印は 2002 年～2016 年度に観察された場所；●印は 2017 年度に観察された場所



図Ⅱ-2-5. 昆陽池で標識した個体が観察された場所
○印は 2001 年～2016 年度に観察された場所；●印は 2017 年度に観察された場所

関西広域連合カワウプロジェクト報告書より

付表 2 a 鳥類標識調査地目録(冠島)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	須川恒	記入年月日	2018年4月24日
PNAME	京都府舞鶴市冠島		PCODE		260009
LOCATION	Kanmuri Island, Maizuru, Kyoto Pref., JAPAN				
ステーション名	冠島2級		標高	20 m	
緯度	35° 41' N: 35.68° N		経度	135° 26' E: 135.43° E	
調査地名	(都道府県) 京都府舞鶴市冠島				
調査地の環境	無人島、周囲約4km、最高点は169.7m、本土(成生岬)より約10km沖合、約2km北に沓島がある。タブやシイで覆われている。主たる調査地は島の東南部の緩傾斜地。				
主要調査者	○須川恒、狩野清貴、佐藤文男、米田重玄、故藤村仁、故吉田直敏				
調査期間・頻度	1971年よりオオミズナギドリに継続調査(それ以前の調査もあり)。現在は年2回春夏に3泊4日の定期調査。オオミズナギドリを区画を記録して夜間手捕り標識。早朝飛び立ち場で標識。島の南端にカスミ網数枚で小鳥類の標識調査。				
主要放鳥種	(繁殖期)主にオオミズナギドリ(春の渡り期)ヒヨドリ、ヒタキ類、ムシクイ類、センニュウ類/夏期調査時に秋の渡り期の走りの小鳥類が少数。				
標識調査の成果	オオミズナギドリ36歳8カ月の長寿記録は国内の標識調査における最長寿記録(2018年4月現在)である。交換リングを行うことでこのような成果が得られた。1978年から10m四方の区画単位に記録を行いその解析をしたところ、オオミズナギドリは極めて小範囲に帰還している状況を明らかにすることができ、国際誌に公表した。小鳥類は京都府初記録が多い。詳細は、冠島調査研究会の以下のウェブサイトを参照のこと。 http://larus.c.ooco.jp/KANMURI.htm				
保護保全上の課題	1970年代と2010年代の比較およびモニタリング1000の結果からオオミズナギドリの営巣密度が減少していることが判明している。冠島に生息するドブネズミのオオミズナギドリへの影響把握が課題である。沓島はカムリウミスズメとヒメクロウミツバメの状況把握と両種の保護が課題である。				
備考	オオミズナギドリは京都府の鳥だがその生態や冠島の生物多様性の重要性への認知度は低く、普及啓発活動をして継続的な調査体制をつくることが課題である。近い将来にできるであろう京都府の自然系博物館を想定した活動が必要である				

付表 3 a 鳥類標識調査地目録(宇治川)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	須川恒	記入年月日	2018年8月30日
PNAME	宇治川向島地区		PCODE	260006	
LOCATION	UjigawaMukajimaChiku				
ステーション名	宇治川2級		標高	10 m	
緯度	34° 55' N : 34.92° N		経度	135 ° 46' E : 135.76° E	
調査地名	京都府京都市伏見区向島上林町宇治川河川敷				
調査地の環境	幅約0.5kmの宇治川左岸河川敷。ヨシ原とオギ原、ヤナギ林がある。ヨシは約3mの高さに生育する。ヨシ業者により冬に刈取りされ火入れがあることで良好なヨシ原が維持されている。				
主要調査者	○須川恒、狩野清貴、中森純也				
調査期間・頻度	1978年からツバメの集団ねぐらを対象に毎夏調査を数回実施している。1986年頃に冬期の調査もしている。近年は須川恒が7月～9月に集団ねぐらを対象に調査を実施している。中森純也が周年対象に調査をした。最近狩野清貴が周年調査(月1日)を開始している。				
主要放鳥種	(春の渡り期)(繁殖期)オオヨシキリ、ウグイス(集団ねぐらの時期)ツバメ、オオヨシキリ、カワラヒワ(秋の渡り期)(越冬期)				
標識調査の成果	宇治川のツバメの集団ねぐらは1973年に発見された。1980年頃河川敷公園計画に反対してヨシ原保護のための共同調査があり、ツバメの集団ねぐら地となるヨシ原保護のための調査が当地のヨシ原保全につながった。1980年代後第2京阪道路架橋計画があり調査の一環としても標識調査を行いヨシ原の保全策につながった。1991年からは龍谷大学の夏期集中講義における野外観察の一環として複数のバンダーがかかわる標識調査見学も行っている。				
保護保全上の課題	宇治川や琵琶湖湖岸のヨシ原保全のためにさまざまな分野の人が連携してとりむ動きがはじまっている。その際にツバメの集団ねぐらは多くの人々が湿地にあるヨシ原に注目する上での重要な役割を果たしている。標識調査の成果も含めて、ヨシ原保全に資するさらなる情報発信が課題である。				
備考	宇治川のツバメの集団ねぐらの解説、鳥類標識調査の結果を紹介するウェブサイト(http://larus.c.ooco.jp/TSUBAME.htm)をつくっている。宇治川ほかのツバメの増地保護に関する資料へのリンクもしている。				

付表 4 a 鳥類標識調査地目録(鴨川)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	須川恒	記入年月日	2018年8月31日
PNAME	京都市鴨川			PCODE	260010
LOCATION	KyotoKamoRiver				
ステーション名	宇治川2級	標高	86m		
緯度	35 ° 4' N : 35.06° N		経度	135° 45' E : 135.75° E	
調査地名	京都府京都市北区紫竹上堀川町鴨川御園橋付近(鴨川の多少離れた調査地もこの場所にまとめて報告)				
調査地の環境	鴨川は京都市街地を流れる観光地となっている都市河川。水はきれい。洪水制御用落差工が多い。水辺へ降りやすい。高水敷は人の利用多い。1970年代以降水鳥が多く越冬。				
主要調査者	須川恒、大槻史郎(故人)、有馬浩史、調査協力者多数。				
調査期間・頻度	1979年2月より越冬するユリカモメを対象とした調査を冬に数回行った。パンくずによってくる群れを無双網で捕獲するほか、パンによってくる個体を手捕りした。標識(金属および番号が刻印されたカラーリング装着)、計測後放鳥。観察情報を和田岳さんの協力で収集している。				
主要放鳥種	(越冬期)ユリカモメを対象とした調査。5月に入って夏羽となった個体へ標識したこともある。				
標識調査の成果	1978-9年冬から2005-6年冬にかけて計1135羽に標識した。冬の最多標識数は123羽(1983-4年冬)。鴨川のユリカモメの越冬数が減少して捕獲効率が悪くなったので中断中。鴨川で標識した個体は鴨川に帰還することが判明した。また一部は越冬地を移動する個体も確認された。繁殖地のカムチャツカの研究者と連絡することによって7羽の回収記録を得た。また鴨川の標識個体がロシアでも回収されている。冷戦の時代にユリカモメを通してソ連時代の鳥類学者と交流ができた効果は大きくその後のさまざまな渡り鳥の調査や保護につながった。				
保護保全上の課題	生物親和都市の本でユリカモメの渡り調査を紹介し都市河川としての鴨川の課題を整理した(2004年「いのちの森」京都大学学術出版会)。都市河川のカラーマーキング調査の普及啓発ブースでユリカモメの調査を紹介した(2017年11月 http://larus.c.ooco.jp/COLORBIRD.htm)				
備考	関西におけるユリカモメのカラーリング標識は総計1387羽(1979~2015年)。鴨川以外の調査地は京都市桂川、大阪市大和川、西宮市武庫川、伊丹市昆陽池公園、草津市琵琶湖岸がある。				

付表 5 a 鳥類標識調査地目録(精華大)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者 狩野清貴	記入年月日	2018年7月30日
PNAME	京都木野地区(精華大)		PCODE	260046
LOCATION	KyotoHataedaChiku			
ステーション名	宇治川2級	標高	150m	
緯度	35° 4' N : 35.07 ° N	経度	135° 46' E : 135.77° E	
調査地名	京都市左京区岩倉木野町京都精華大学(構内の山林)			
調査地の環境	精華大構内の東端。谷筋から尾根筋まで。照葉樹と落葉広葉樹の混交林で樹高は5~10m。近くにヒノキ林もある。			
主要調査者	狩野清貴、手伝い(辻本大地、田中智)			
調査期間・頻度	2015年より、月1回を原則として年12回調査。2019年3月で終了予定。カスミ網6枚程度(ATX3枚、HTX3枚)7:00~11:00の調査。			
主要放鳥種	(繁殖期)ウグイス、メジロ、キビタキなど(越冬期)ルリビタキ、クロジなど(春秋の渡り期)いろいろ。			
標識調査の成果	3年連続でキビタキとルリビタキのリターン記録が得られた。夏鳥の繁殖地、冬鳥の越冬地としてこれらの種が定着している実態が判明した。			
保護保全上の課題	大学構内で継続的調査をした4年間の成果をまとめてお世話になった人に報告書の形にして手渡すことが当面の課題。			
備考	調査にあたっては板倉豊さん(京都精華大学人文学部 総合人文学科)の協力を得ている。最初のPCODEは近いので住田益信さんの調査地(左京区上高野付近)と同じとするように標識センターから指示があったがその後別のPCODEとなった。			

付表 6 a 鳥類標識調査地目録(淀川十三)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者 久下直哉	記入年月日	2018年7月30日
PNAME	大阪淀川十三干潟,ヨシ原		PCODE	270054
LOCATION	Jyuso Tideland, Reed Bed			
ステーション名	淀川口2級ステーション		標高	0m
緯度	34° 43' N :34.72° N		経度	135° 30' E :135.50°
調査地名	大阪府大阪市淀川区木川東淀川右岸十三干潟,ヨシ原			
調査地の環境	淀川河口右岸の高水敷で、9割はヨシ原、残り1割はセイタカアワダチソウなど草地。河辺は干潟で潮の干満がある。			
主要調査者	久下直哉、小畑義之			
調査期間・頻度	調査は1996年12月から小畑が、1997年から久下が引き継ぎ現在まで継続して河口のヨシ原の越冬期の調査をしている。期間は毎年11月中旬から12月上旬に5回ほど、ATX4枚程のカシミ網で実施している。			
主要放鳥種	冬の越冬鳥飛来調査としてオオジュリン90%、残り10%はツリスガラなど。乾燥した草地では、ホオジロ類、ベニマシコ、スズメなど。			
標識調査の成果	調査の大きな成果としてオオジュリンは北は北海道函館、関東甲信越からは渡良瀬遊水池、浮島、福島潟、西日本からは九州今津からの回収があり、また数年にわたるリターン記録も確認されており、オオジュリンと越冬地や中継地としてこのヨシ原が重要であることが示されている。詳しくは詳細に以下の概要を掲載する。久下直哉(2008)大阪府下における淀川河川敷のオオジュリンはどこからやってくるの？日本鳥類標識協会全国大会(京都)講演要旨集。			
保護保全上の課題	十三干潟のヨシ原は業者により新年には刈り取られる。ヨシ刈りはヨシ原の維持では有益と思うが同じ場所での調査がしにくい理由となっており、継続的調査のための工夫が必要である。標識調査によって河口域のヨシ原の重要性をアピールすることが大切と考える。			
備考	淀川十三干潟付近ではホームレスがテントで居住したり、変質者がうろろしていることがあった。淀川上流の右岸豊里のヨシ原では武士良三さんが1990年代半ばまで調査をしていた。さらに上流の右岸鶴殿のヨシ原では村上亮・山根みどりさんが調査していた。			

付表 6 b 鳥類標識調査地目録(淀川十三)追加シート

詳細情報	記入者	久下直哉	記入年月日	2018年7月30日
PNAME	大阪淀川十三干潟、ヨシ原		PCODE	270054
詳細情報テーマ	オオジュリンの越冬地、中継地としての淀川河口のヨシ原 その1			
<p>久下直哉(2008)大阪府下における淀川河川敷のオオジュリンはどこからやってくるの？.日本鳥類標識協会全国大会(京都)講演要旨集からの概要.http://birdbanding-assn.jp/J04_convention/2008/2008kuge.htm オオジュリンがどこから淀川十三干潟に飛来して、越冬して行くのかまたは経由して更に別の地点に移動していくのかという事を主に1997年より調査を継続している。以下のような調査結果となった。調査を続けていると、1997年に淀川河川敷で放鳥した個体が、5年後に再捕獲することもあった。そのように、オオジュリンにとって淀川河川敷のヨシ原は越冬地または中継地点の役割を十分に果たしていることがいえると再捕獲によって解明されてきた。</p> <p>淀川河川敷（新御堂大橋～十三干潟）からの移動回収 表1</p> <p>初放鳥日 種名 性 齢 再捕獲日 回収場所 経過時間</p> <p>1 98.11.25 オオジュリン ♀ J 02.11.22 福井県九頭龍川河口 3年11ヶ月</p> <p>2 99.12.1 オオジュリン ♀ J 03.11.02 新潟県福島潟 3年11ヶ月</p> <p>3 99.12.1 オオジュリン ♂ J 00.12.01 山口県宇部市 366日</p> <p>4 99.12.10 オオジュリン ♂ J 99.12.31 大阪府高槻市鶴殿 21日</p> <p>5 99.12.10 オオジュリン ♀ J 01.10.30 静岡県沼津市浮島沼 1年10ヶ月</p> <p>6 99.12.10 オオジュリン ♀ J 01.11.07 静岡県沼津市浮島沼 1年10ヶ月</p> <p>淀川を出発し北陸方面へ2例(福井県、新潟県)、本州の西の端(山口県)、関東方面2例(静岡県)、に移動している。大阪府高槻市鶴殿を通過しているということで淀川を北上し北陸へ移動、また宇部市に移動しているということで瀬戸内海側を、沼津へ移動していることで太平洋側を移動していることで、淀川を通過点または越冬地として重要な役割を果たしているのではないかと考えている。表2(略)は淀川河川敷に各地から越冬のために移動してきた日時と放鳥地、経過時間を示す。</p> <p>表1、表2から通過地点が共通していることが判る。例えば、表1より淀川河川敷より放鳥したオオジュリンが新潟県福島潟へ移動し、逆に福島潟から放鳥されたオオジュリンが淀川河川敷に移動してきている。同じく、静岡県浮島沼より、オオジュリンが行き来していることが明らかになっている。</p> <p>写真 標識時撮影のオオジュリン</p>				
				

付表 7 a 鳥類標識調査地目録(穂谷)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	古園由香	記入年月日	2018年7月30日
PNAME	枚方穂谷		PCODE		270073
LOCATION	HirakataHotani				
ステーション名	淀川口2級			標高	300m
緯度	34° 47' N: 34.79 ° N		経度	135° 43' E: 135.72° E	
調査地名	大阪府枚方市大字穂谷				
調査地の環境	標高250~300mの山地で、植生はコナラが優占する落葉広葉樹林と竹林、ヒノキ林。				
主要調査者	古園由香				
調査期間・頻度	2000年4月から原則毎月1回調査を行っている。約13枚のカシミ網(ATX6枚、HTX3枚、DTX3枚、CTX1枚)を使用。[捕獲した鳥は、各部と体重を計測してから放鳥している。体重については、Rt、Rpにおいても計測を行っている。				
主要放鳥種	(繁殖期)キビタキ、ウグイス、メジロ(越冬期)ルリビタキ、シロハラ、アオジ(春秋の渡り期)いろいろ。				
標識調査の成果	毎月調査をしているのでリターンやリピート個体が多い。越冬個体の体重個体についてまとめている(備考参照)。調査結果は、アルラ誌や、枚方いきもの調査会年報で報告している。大阪府でヤブサメの越冬を初確認して報告した。古園由香(2013)ヤブサメ <i>Urosphena squameiceps</i> の大阪府における越冬期の捕獲記録.日本鳥類標識協会誌,25:9-13.				
保護保全上の課題	竹林の拡大が続き公園管理者は苦勞している。				
備考	ルリビタキおよびシロハラについて体重測定結果をまとめた。ルリビタキの年間の体重の変化、ルリビタキとシロハラのリピート時による体重の変化を見つけた。古園由香(2008)鳥の重さを量ってみれば.日本鳥類標識協会2008大会講演要旨集.				

付表 8 a 鳥類標識調査地目録(万博)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	山根みどり	記入年月日	2018年9月7日
PNAME	吹田市万博公園		PCODE	270035	
LOCATION	大阪府吹田市万博公園				
ステーション名	淀川2級			標高	50m
緯度	34° 48' N : 34.8° N		経度	135° 32' E : 135.53° E	
調査地名	OsakaBanpakuPark				
調査地の環境	大阪万博(1970年)後にパピリオン跡などにつくられた面積140haの自立した森を中心とする公園。落葉広葉樹林、常緑広葉樹林、アカマツ林、芝生広場、池、小川がある				
主要調査者	山根みどり、村上亮				
調査期間・頻度	1992年4月～1997年5月 月に1～3回。調査時間は、万博協会の許可を得て一般客が入る公園開園前の早朝6時～9時まで園内の様々な環境にカスミ網を張って行った。また巣箱を12個設置することによって雛への標識調査を行った。				
主要放鳥種	(春の渡り期)シメ、アカハラなども(繁殖期)シジュウカラ、ヤマガラ、カワラヒワが上位3種(秋の渡り期)キビタキ、メボソムシクイ、コサメビタキなども(越冬期)アオジ、シロハラ、ルリビタキが上位3種				
標識調査の成果	<p>住宅街に囲まれた人工的な緑地の野鳥による利用状況を調査することを目的として様々な環境でカスミ網を張り、放鳥種を比較した。バードウォッチングではあまり野鳥が観察されないとされていた「野鳥の森」と「水草の池周辺」が放鳥種数で上位2位を占めた。</p> <p>冬鳥のアオジ、シロハラ、ルリビタキは再放鳥率も高く、よく定着し、また多くの帰還を確認した。</p> <p>繁殖期の巣箱調査で12個のうち10個をシジュウカラとヤマガラが利用し、住宅難であることが示された。調査した時期はまだ樹木が細く営巣地とできる樹洞が少ないものと思われた。平地でヤマガラが営巣することは当時は珍しかった。巢内ヒナに標識したうち、シジュウカラ1羽が2年後に豊中市で繁殖中にRCされた(熊代氏による)。</p> <p>1996年2月に、メジロのRCがあった(1994年5月新潟県で放鳥)。</p>				
保護保全上の課題	当時憂慮したのは草原性の小鳥類が年々減少することだった。有料公園のため、常に樹木、下草、芝生の手入れがされ、殺虫剤もかなり使用されていた。見た目を美しくするために下草刈りが徹底された。秋の落ち葉は、林内でも徹底的に清掃された。提出した年次報告書に、殺虫剤の量を控えること、落ち葉を片付けないことで生き物に優しい公園になると提言したが、それでは人間にやさしい公園にはならないとのこと(子供が毛虫に刺されると苦情が寄せられる)。こういった公園を環境教育の場に利用していくことを望んだが、当時は難しかった。				
備考	吹田市から転居したため調査の継続はできなかった。草原性鳥類が減ったのは管理しすぎもあるが森林の遷移で草地在り減ったことも大きく、その後万博公園(財務省から大阪府に移管)によって様々な環境をつくりだす努力も開始されていると聞く。開園後に多い野鳥観察者との交流はほとんどなかったが、たまたま標識个体を見せる機会があって多くの野鳥観察者に興味を持ってもらえた。そのうちの一人(村上亮さん)は標識に興味をもたれ調査を手伝いいただき、熱心なバンダーになられた。				

付表 8 b 鳥類標識調査地目録(万博)追加シート

鳥類標識調査地目録		記入者 山根みどり	記入年月日	2018年9月7日
PNAME	吹田市万博公園		PCODE	270035
LOCATION	大阪府吹田市万博公園			
<p>これらの標識調査の成果のうち1992～5年度については以下の報告書にまとめ万博協会にも提出した。</p> <p>山根みどり(1992)1992年度日本万国博覧会記念公園における鳥類標識調査実施報告. 山根みどり(1993)1993年度日本万国博覧会記念公園における鳥類標識調査実施報告. 山根みどり(1994)1994年度日本万国博覧会記念公園における鳥類標識調査実施報告. また以下にも報告している。</p> <p>山根みどり(1993)(大阪)万博公園でのバンディング.Alula,6:. 山根みどり(1994)1993.1.1～1993.12.31 の(大阪万博公園における)放鳥結果.Alula,7:. 山根みどり(1995)大阪府高槻市前島、吹田市万博公園.Alula,9:. 山根みどり(1995)万博公園での春の渡り調査.Alula,10:. 山根みどり(1996)越冬鳥調査まとめ.Alula,12:. 山根みどり(2000)市域の網場.Alula,21:. 山根みどり(1995)1995年度日本万国博覧会記念公園における鳥類標識調査実施報告.</p>				

付表 9 a 鳥類標識調査地目録(千里緑地)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	熊代直生	記入年月日	2018年 9月 9日
PNAME	大阪府豊中市千里緑地		PCODE	270028	
LOCATION	SenriRhokuchi				
ステーション名	淀川口2級	標高	100m		
緯度	34° 48' N:34.80° N	経度	135° 29'E :135.48° E		
調査地名	大阪府豊中市西緑丘／新千里西町境界				
調査地の環境	アカマツを主体とし、稜線に帯状に残った林。周囲は住宅街。千里ニュータウンの外周に配置されたグリーンベルトの一部。				
主要調査者	熊代直生、久下直哉				
調査期間・頻度	1991年～2004年日の出から日の入りまでの終日調査を月に2回実施し、6月7月はオフ。犬の散歩などの利用者が多いため、5枚程度の網(ATX)を歩道から離れた林内に個別に張っていた。越冬鳥が網場を覚えている可能性があったため、網場や使用枚数は適宜変更した。				
主要放鳥種	アオジ、ヒヨドリ、シロハラ、メジロ、ルリビタキ				
標識調査の成果	41種のべ1524個体を放鳥した。留鳥ではないシロハラ、ルリビタキ、ウグイス、アオジにもリターンが記録され、市街地に囲まれた島状の緑地であっても、安定した越冬地として機能しうるものと考えられた。以下に調査結果を紹介した。 熊代直生(1993)91～92年度バンディング報告.Alula,4:. 熊代直生(1995)近況報告.Alula,10:. 熊代直生(1995)「私の網場紹介」「越冬鳥調査」「春の渡り調査」.Alula,13:. 熊代直生(1998)1997年秋～1998年春までの豊中市千里緑地の標識放鳥状況.Alula,17:. 熊代直生(1999)1998年度(1998年8月～1999年5月)の豊中市千里緑地の標識調査.Alula,19:.				
保護保全上の課題	近隣の住宅地でノラネコに餌付けをする家があり、山中にネコが増え、網に鳥がかかるのを待ち伏せするネコも現れた。このため、2004年の1回を最後に調査を中止した。				
備考	大阪府の標識データベースの提供が標識センターから得られたのでさまざまな観点からの集約や比較が今後可能である。				

付表 10 a 鳥類標識調査地目録(和泉葛城)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	中村進	記入年月日	2018年9月9日
PNAME	和泉葛城山		PCODE	300015	
LOCATION	IzumiKatsuragi-mt.				
ステーション名	なし			標高	858m
緯度	34° 21' N : 34.35° N		経度	135° 26' E : 135.43° E	
調査地名	大阪府岸和田市和泉葛城山山頂(和歌山県との府県境)。PCODEは和歌山県(30)となっている(和歌山県紀の川市)。				
調査地の環境	南限に近く奇跡的に残ったということで1923年に国の天然記念物指定された山頂のブナ林に隣接する緩衝帯の尾根筋。				
主要調査者	中村進				
調査期間・頻度	2000年8月開始(2001年中断)。2006年までは8月のみ数日。2007年は4月と8月。2008年からは4-5月、8-12月に10日前後実施。カスミ網数枚による小鳥類の標識調査。延べ調査日数は2018年8月までで128日。				
主要放鳥種	(春の渡り・繁殖初期)ウグイス、シジュウカラの順(繁殖終期・秋の渡り期)キビタキ・オオルリが同数(越冬期)エナガ・ルリビタキ(同数)				
標識調査の成果	標識鳥は多い種から: 1. キビタキ、2. オオルリ、3. ウグイス、4. クロツグミ、5. ヤマガラ 少数だがオオアカゲラ、アオゲラ、ツミ、オオコノハズク、コルリ、マミジロなども標識できた。				
保護保全上の課題	ブナ林やそれにとまなう自然の価値を普及啓発する活動として、一般の人に樹木実習や昆虫・植物などの観察会を実施し、その一環として鳥類の標識調査見学の機会も持ち、生息する鳥類やバンディングについての理解を深めてもらっている。毎回10-20人くらいの人々が参加される。				
備考	<u>Wikipediaに和泉葛城山の解説がある</u>				

付表 11a 鳥類標識調査地目録(織田山)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者 須川恒	記入年月日	2018年8月29日
PNAME	織田山ステーション		PCODE	180001
LOCATION	Otayama Station			
ステーション名	織田山1級ステーション		標高	460m
緯度	35° 58' N:35.98° N		経度	136° 1' E:136.02° E
調査地名	福井県丹生郡越前町笈松			
調査地の環境	ステーションは尾根の地形。かつてカスミ網猟の「鳥屋場」だった。周辺は杉などの植林が多いが、落葉広葉樹林で網の高さまで低く刈り込まれている。			
主要調査者	現在は佐藤文男(山階鳥研)、吉田一朗、多数の支援者。過去 米田重玄ら多数。			
調査期間・頻度	1973年開設後継続的な調査がされている。現在秋の渡り期は10月中旬～11月上旬に36mmメッシュ12mの網を49枚、春の渡り期は4月下旬～5月上旬に36mmメッシュ12mの網を31枚で調査をしている。			
主要放鳥種	最近(2015年)では(秋の渡り期)アオジ、シロハラ、メジロ、マミチャジナイ(春の渡り期)キビタキ、アオジ、ウグイス。			
標識調査の成果	<p>1998年時点で福井県が紹介した成果のまとめは以下。</p> <p>これまで(1973～1998年)に約7万6千羽に標識をつけ、確認された種類は78種となっている。ほとんど移動しないと考えられていたシジュウカラが北海道の夕張市で発見され、また函館で標識されたウグイスが織田で発見された。体重約7gのヤブサメが4年間ほぼ連続で、ヤマガラ7年間連続で捕獲された。織田山で標識したツグミが韓国や中国で発見され、また、マミチャジナイがフィリピンで、カシラダカがロシアで発見された。多数の若手の鳥類研究者を養成してきた。米田重玄・上木泰男(2003)織田山ステーションの標識調査(30年間の記録)。日本鳥類標識協会2003大会講演要旨集。 http://birdbanding-assn.jp/J04_convention/taikai.htmより 福井県による織田山鳥類観測一級ステーションの紹介 http://www.erc.pref.fukui.jp/gbank/otayama/otayama_st.html 古園由香(2015)織田山一級ステーションの紹介 Alula,50.</p>			
保護保全上の課題	継続的モニタリング(特に秋の渡り期)のために、網場の樹木の管理(成長を押さえるなど)が欠かせない。映画「鳥の道を越えて」において織田山の標識調査活動が大きく紹介された。鳥類標識調査の技術向上や普及啓発をすすめる上でこのステーションのさらなる活用が課題である。			
備考	環境省生物多様性センターの毎年の鳥類標識調査報告書で日別放鳥数が報告されている。 http://www.biodic.go.jp/banding/report.html			

付表 12 a 鳥類標識調査地目録(中池見)基本シート

鳥類標識調査地目録		記入者	吉田一朗	記入年月日	2018年8月25日
PNAME	中池見湿地			PCODE	180019
LOCATION	TsurugaNakaikemi				
ステーション名	その他			標高	47m
緯度	35° 39' N	:35.62° N	経度	136° 6' E	:136.10° E
調査地名	福井県 敦賀市 樫曲 中池見				
調査地の環境	袋状埋積谷の地形で、湿地の周囲が山に囲まれている。中池見湿地といわれる部分は、標高約47m、面積約25haの内陸低湿地で、泥炭層が厚く堆積している。ヨシ原などが広がる湿地。				
主要調査者	吉田一朗				
調査期間・頻度	2000年から毎年行ってきたが、調査日数や季節は年によって異なる。最近は4月～6月上旬、8月下旬～12月上旬。網場は中池見湿地内に設置することが多く、林などでも調査した。網の枚数は20枚前後。最近は、小規模でも同じ条件で継続できることを重視している。				
主要放鳥種	(春の渡り期)アオジ、オオジュリン(繁殖期)オオヨシキリ、ツバメ(秋の渡り期)ノジコ、アオジ(越冬期)オオジュリン、カシラダカ 主要2種程度を記入した。				
標識調査の成果	14年間の標識調査で放鳥されたのは65種になる。すべての月の記録を残すことができた(毎年調査したのは10月のみ1月はほとんど調査していない)。成果の報告書や紹介しているウェブサイトは詳細情報を参照のこと。中池見湿地はラムサール条約に登録されたが、ノジコの渡りの中継地であることが登録要件の一つになった。マキノセンニュウなどの確認もされている。継続的な標識調査によって明らかになった事実は中池見湿地の保全に大きく貢献している。文献など 河野昭一(1998)中池見湿地の生物多様性と保全の意義。日本生態学会誌,48:159-161(ウェブアクセス可)。吉田一朗(2004)敦賀市中池見湿地の保護と標識調査。日本鳥類標識協会2004大会講演要旨集。吉田一朗(2013)中池見湿地保全と鳥類標識調査。日本鳥類標識協会2013大会講演要旨集。 http://birdbanding-assn.jp/J04_convention/taikai.htm より各年度大会の講演要旨集へ。				
保護保全上の課題	北陸新幹線(深山トンネル等)の建設、湿地西側を通る国道8号の4車線化など。どのような状態で残していくのか、色々な考え方があ。鳥を含む調査員の不足。中池見の保護を重視した継続しやすい標識調査の方法。ノジコがラムサール条約の登録要件の一つになったことを、どのように生かすのか。外来生物の増加対策が課題。				
備考	ラムサール条約登録湿地、国定公園。近畿地方への小鳥類の渡りの入り口や出口としてこの場所の四季に渡る調査は意義があると思われる。				